



アメリカ見聞録今昔物語

Visit of united state of America now from old

石井知行

ISHII Tomoyuki

ダイホーコンサルタント株式会社/
総務部/次長



1. はじめに

今から35年前、当時アメリカに行くのは、「成田」ではなく、まだ「羽田」の時代であった。すでに戦後復興も終了し、経済的にも余裕ができ始めていた時代で、国民の目が海外へ向き始めたころである。当然ながら、個人旅行はビザがないといけないということで、アメリカの親戚から「招待状」と称する手紙を書いてもらって、ビザを取得した覚えがある。現在では、成田だけでなく、関空および地方空港からでも海外へ行けるようになったことを考えると、隔世の感がある。特定の業種・特に商社の方などは当時からも頻繁に海外へ行けるチャンスがあるが、現在でも私は、海外へ行くチャンスはなかなかない。

月並みではあるが、やはり一番印象に残る土地といえば「アメリカ」がまずあげられると思う。事実まわりを見渡しても、マクドナルドから始まってドトールコーヒー、東京ディズニーランド、大リーグの野球中継、ゴルフと切りがない。



■写真1-エンパイア・ステート・ビルの上端部 ■写真2-ニューヨークの象徴自由の女神像

2. Empire State Building (エンパイア・ステート・ビル)

大不況の最中、1931年5月に立てられたビル。御承知ニューヨーク随一のランドマーク。

その高さは381m。大変興味深いのは、あまりにも高く、当時は本当に大丈夫なのかと安全性が大いに懸念された。ニューヨークはもともと地盤が固く、しかも島全体が大きな岩盤で形成されていることから、高層ビルの建設も可能であった。

当初は誰も入居者がなく、「エンブティ(からっぽ)のステートビル」と陰口をたたかれた話は有名である。しかし、感心するのは70年たった今でもヒビ割れひとつなく、ビル内は古さが残るがりっぱに健在していることである。展望台へは結構時間待ちをしなくてはならない。映画のロケにもしばしば使われる。大抵の観光客は86階まで行きストップ、勇気のある人はこの上にもまだ行ける。大体にして、夜空に映えるエンパイア・ステート・ビルなどの一連の高層ビルはとても美しい。夜景のヘリコプターツアーには是非とも挑戦されてはと思う。

3. Statue of Liberty (Liberty Island) (自由の女神)

この像を初めてみると誰でも感激すると思う。どこかに似たような像が日本でもあちこちに存在するが、さすがに本物は違う。ニューヨーク観光のポイント中のポイントで、「これで本当に自分はNEW YORKに来たんだ」と感じる。今は、テロの影響で入場が制限されており、以前ほど自由に入れにくい。フランスが、

アメリカ独立100年を祝い変わらぬ友好のしるしとして贈ったもので、ニューヨーク湾のリバティ島にある。ヨーロッパからの移民達が港に入港する際、この像を目にして新大陸への希望に夢をふくらませたといわれる。フェリーで見学するのが一番である。大勢の観光客が押し寄せて混雑するが、皆そのことは百も承知で、根気強く、ハンバーグを食べながら順番を待っている。



■写真3-ニューヨーク市内の街かど

■写真4、5-セントラルパーク・ウエストの高級マンション郡のなかにあるダコタアパート

4. Wall Street (ウォール街)

かつて、マンハッタンに入植したオランダ人がネイティブ・アメリカンやイギリス人からの攻撃を防ぐためにハドソン・リバーからイースト・リバーまで連なる丸太の防壁を築いたことから、その丸太をとってウォール街と名前がついた。アメリカ金融業界の心臓部で、日本から多くの金融機関が競って出店した昔がなつかしい。今は、この金融機関も撤退傾向で、特に9.11以後は縮小されてしまった。

5. Dakota Apartments (ダコタアパート)

ご存じのように、ジョン・レノンとオノ・ヨーコが暮らしていたマンション。セントラルパーク・ウエストにある。ニューヨークでも屈指の最高級マンション。ここに入居するには厳しい審査をパスしなければならない。ただお金があるだけでは入居できない。人物と富を兼ね備えた者だけが入居できる。セントラルパークのすぐそばに位置しており、ロケーションは抜群である。このあたりは19世紀末に、豪華なアパートが次々と建てられた地帯であり、どのマンションもかなりの年数が経過しているものの、中は、きれいにリフォームされているものもある。ジョン・レノンはこのマンションを出たところを殺されてしまった。

6. Central Park (セントラルパーク)

マンハッタンのおアシス、セントラルパーク。摩天楼のど真ん中にある公園である。ニューヨーカーに愛される大切な公園で大都会にこれだけの広大な公園が存在す



■写真6-セントラルパーク内の一角「STRAW BERRY FIELDS」

ること自体、日本人から見れば驚きである。日本ならば、すぐに再開発の名のもとに乱開発されるのがいいところ。この中にStrawberry Fieldsと呼ばれる一角がある。ジョン・レノンがマンションの前で殺されるという悲しいでき事のあと、代表曲「ストロベリーフィールズ・フォーエバー」にちなみ、オノ・ヨーコがデザインした涙のしずく形をした大理石が埋められている一角である。イタリアのナポリから贈られた大理石のポンペイモザイクの中心には、「イマジン (IMAGIN)」と彫られている。手入れがゆき届いていて、ベンチに座っているとリスが顔をのぞかせる。しかし、夜間・早朝には殺人現場になってしまうこともある。死にたくなければ1人で歩かないことである。

1850年着工してから140年以上の月日が過ぎ去り、その間何回かの改修を経て現在のセントラルパークがある。ゴミ捨て場から都市公園に生まれ変わったその姿は、日本もおおに見習いたいものである。この公園を考えたウィリアム・カレン・ブライアントは非常にえらいと思う。

7. Lincoln Memorial (リンカーン記念館)

第16代大統領エイブラハム・リンカーンの偉業を称えて建立されたモメンタル。「人民の人民による人民のた



■写真7ーワシントンにあるリンカーン記念館

■写真8ーこちらは裏側のホワイト・ハウス

■写真9ー白亜のドームをいただく国会議事堂

■写真10ー坂の傾斜もうまくとりいれているヴィクトリアンハウス

■写真11ーサンフランシスコのシンボル
ゴールデンゲートブリッジ

めの政治」と言ったゲティスバーグでの演説は有名。
1915年2月に工事開始し、1年後に完成した。アメリカ自体は、300年にも満たない若い国ではあるが、全世界からあらゆる人種が集まってきており、それぞれの文化を开花している。よく勘違いされるが、アメリカは決して「自由」の国ではない。厳しい階級社会である。

8. White House (ホワイト・ハウス)
正式名は、president's House。
ホワイト・ハウスはまさに世界民主政治の牙城。世界を動かしている。イギリスとの戦争で焼かれた傷跡をかくすために、1814年に元の建物を白く塗ったことからホワイト・ハウスと呼ばれたといわれている。

ホワイト・ハウスのモール側に大統領の執務室があるが、こちらは「裏側」であり、ホワイト・ハウスの正面ではない。正面はテロのためセキュリティーが厳しく、外からながめるだけである。当然ながら警備が厳重になったが、以前は中に入れた。時間に制約のある観光客はうっかりしていると、裏側に案内される。なぜなら、正面は時間がかかるので裏側を案内してホワイト・ハウスと紹介するのである。観光客は裏側か正面か知らないからである。

9. United States Capitol (国会議事堂)
白亜のドームをいただく建築物。連邦政府の議会のための議事堂。数あるワシントンDCを象徴する建造物の中でもトップクラスの建物である。ワシントンDCの町はこのキャピトルを中心に造られている。
議事堂のドームのてっぺんには、よく見ると女神像があり「自由



■写真12、13ースタンフォード大学の構内



■写真14、15ースタンフォード大学の構内

の女神像」とよばれている。

10. Victorian House (ヴィクトリアン・ハウス)
サンフランシスコが都市として出発したのは1849年のゴールドラッシュの時。この時の富によって、この町は空前の住宅ブームに沸いた。豊富な資金と急激な人工増加および2×4住宅の出現によって、空前の建築ブームが出現し、手ごろな価格で華やかなヴィクトリアンの建売住宅を手に入れることができた。サンフランシスコは霧が多く、意外と寒い気候のため、日光をとり入れる出窓が必要であり、霧の中でも目立つ、派手な色調が好んでとり入れられ、後にサンフランシスコ・スタイルとも称されるようになった。サンフランシスコの建物はいずれも坂の傾斜を巧みにとり入れている。アメリカの住宅は民族のルーツといわれるがまさにそのとおりである。

11. Golden Gate Bridge (ゴールデンゲート・ブリッジ)
1937年に完成。全長約3キロ
濃霧の時にもよく見えるように朱色に塗ってある。サンフランシスコ湾をはさんで陸地を結ぶ橋。今も昔もなくてはならないものである。中には1934年から29年間、連邦刑務所だったアルカトラス島がある。現在は歴史的遺産となっている。海水の温度が低いため、脱出不可能の刑務所といわれていた。溺死した囚人の写真を使って、脱獄はやめなさいというポスターがはってある。これは映画にもなって有名。体温の低下を防ぐため、雨衣を浮きがわりにしていたが、たいていは冷たい海流にのまれ死体となってもどって来た。あのアルカポネも収容されていた。

12. Leland Stanford Juniot University (スタンフォード大学)
ロマネスク様式のメモリアル・チャーチがあり、見事なイタリア様式のモザイクとステンドグラスがみられる。環境は抜群で、広大な敷地を有している。雲1つなく青い空が印象的である。晴天が多いことから、特に映画産業が発達したと言われている。タイガーウッズの母校でもある。入学するには金がおおいにかかる。

13. National Air and Space Museum (国立航空宇宙博物館)
人類の夢と努力が成し遂げた科学技術の栄光の殿堂。第2次大戦で使われたゼロ戦・スピットファイアー・メッサ

ーシュミット・ムスタングなどがならんで展示してある。これらを比較して見ると、残念ながら、日本の劣勢は否めない。確かにゼロ戦も名機といわれているが、構成部品の品質の差は歴然としている。正直言ってこれでは日本が戦争に負けるのも当然と感じた。ムスタングの方が機体も一回り大きく、全金属製でキラキラかがやいているのに対して、ゼロ戦は1回り小さく弱々しい。エンジンの馬力も1.5倍、大直径プロペラ、良質のガソリンとエンジンがあつてこそその性能の差が生み出す迫力がある。ここに並べられている機体はどれも当時の生産国の置かれている資源の状況、文化的背景までも反映している。
宇宙船も数多く残っている。映画「アポロ13号」にもあるように、NASA(アメリカ航空宇宙局)は打ち上げに際して必ず同じものを2つ作り、1つを実際に使い1つは本部において、事故・トラブルのためにモニターしている。したがって、無事飛行が終了すればモニター分は不用となり展示場行きとなる。宇宙開発には、膨大な資金を必要とすることから、NASAでは、開発した技術を民間に払い下げている。「レトルト食品」「上を向いて書けるボールペン」などはいいい例である。

14. おわりに
アメリカは自由の国との印象が強いが、実際は大変な競争社会である。近年、「能力主義」「成果主義」など、日本の企業が相次いで導入をし、その厳しさは、我々も経験済みである。短期間に成果をあげないといけなから、人材の消耗も激しい。スポーツ選手や建築家・音楽家などごく一部の能力のある人材は受け入れてくれるが、能力のない者、学歴のないもの、お金のない者は見向きもされない。スポーツ選手にしても、肩をこわせばすぐ解雇である。うかうかしているとすぐ自分のポストはなくなってしまう。加えて、非情な階級社会でもある。
社会の不満分子は町中にゴロゴロしている。そういった彼らにとって生涯に一度も行けないようなレストランに団体で乗りつける日本人客は驚きの極みである。事実、我々の乗ったバスは機関銃で撃たれて、窓ガラスがくもの巣状態にされてしまった。しかし、代わりのバスが30分後にはすぐ到着するところがアメリカ社会。これからも、我々にとって影響の大きい「遠くて近い隣国」アメリカの動きには注目したい。